

第4回国語ワーキンググループの議題

議題 (1)

内容の構造化、表形式

議題 (2)

国語科を通じて育成する資質・能力 の在り方・示し方について

目標等

(柱書) (資質・能力の趣旨) について、(学習過程) を通して、次のとおり育成することを目指す

(資質・能力の柱ごとの目標)

知識及び技能

思考力、判断力、表現力等

学びに向かう力・人間性等

(見方・考え方)

(対象) を (教科固有の物事を捉える視点) の視点から捉え、(教科固有の考え方や判断の仕方) すること。

第4回議題(2)
論点1

第4回議題(2)
論点2

内容 A話すこと・聞くこと

思・判・表	総合的な発揮	言葉を使う目的 (仮称)	資質・能力 (概略)
	〇〇できる	〇〇〇〇	
		〇〇〇〇	⋮
①知識・技能	統合的な理解	事項のまとめ (仮称)	資質・能力 (概略)
	〇〇できる	〇〇〇〇	
			⋮

※「見方・考え方」は、次期学習指導要領では、解説ではなく学習指導要領本体に位置付ける方向性であることを踏まえ、本概略図に含めている。(参考:第2回・第3回国語WG)

内容 B書くこと

思・判・表	〇〇できる	〇〇〇〇	第4回議題(2) 論点3	
①知・技	〇〇できる	〇〇〇〇		
				⋮

内容 C読むこと

思・判・表	〇〇できる	〇〇〇〇		
①知・技	〇〇できる	〇〇〇〇		
				⋮
②知・技	〇〇できる	〇〇〇〇		
				⋮

※本イメージ図では「領域 (A話すこと・聞くこと/B書くこと/C読むこと) 」→「言葉を使う目的 (仮称) 」の順で上から位置づけて示しているが、「言葉を使う目的 (仮称) 」を領域より上の区分として位置付けることについては、議題(1) 論点1で検討。

**議題
(1)**

内容の構造化、表形式

論点 1 学習内容構造の再整理（目的と領域の関係性について）

検討の背景

- 第2回WGにおいて、目的と領域を掛け合わせて、話や文章の種類を系統的に示した。
(P.10参照 第2回【資料1】 P.8)
- 第3回WGにおいて、〔思考力、判断力、表現力等〕について、
 - **高次の資質・能力の位置づけ**
 - **資質・能力の系統的な発展の見せ方**をより分かりやすく提示するために、「**言葉を使う目的（仮称）**」や「**事項のまとまり（仮称）**」を明確にし、資質・能力間の関係性を整理して示す案を提起した。(P.11参照 第3回【資料1】 P.8)

目的と資質・能力の関係性に関する基本的考え方

第3回WGでは、主に次の二つの視点からの意見が出た。

- 一般的には何らかの目的があり、その目的の実現のために話したり書いたり聞いたり読んだりすると考えられる。この点を重視すれば、表形式で構造を示す際に、「**言葉を使う目的（仮称）**」を「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」という**領域より上の区分として位置付ける**という整理方法が分かりやすいのではないか。
(目的→領域)
- 子供たちの「話す・聞く、書く、読む力」の育成に課題があり、どのような力を育成するのかが分かりづらく混乱が生じている授業も散見される。国語科を「話す・聞く、書く、読む力」をしっかりと育てる教科だと捉えた場合、「**話すこと・聞くこと**」「**書くこと**」「**読むこと**」という**領域をより上の区分として明確に位置付ける**必要があるのではないか。
(領域→目的)



学習内容構造の再整理（目的と領域の関係性について）の論点

国語科における構造の示し方の方向性

- 学習指導要領は、「何を学ぶのか」を示す基準であり、国語科は、学習活動を通して「話す・聞く、書く、読む力」を身に付けることを学習の中心とする教科である。これらの力は国語科固有の学びの中核であると同時に、他教科等の学習を支える基盤としても重要な役割を果たすものである。（P.12参照 第3回【資料1】P.22）
- こうした教科の特性や役割を踏まえると、〔思考力、判断力、表現力等〕の内容を構造化して示すにあたっては、国語科の学習が領域（話す・聞く、書く、読む）を軸として学習を展開する教科であることを明確に示すことが重要である。これらの領域は、指導、評価、指導改善を一体的に進めるための基本的な枠組みであり、子供たちの資質・能力の定着状況を把握するためにも有効である。
- 一方で、領域ごとの学習が子供にとって意味のあるものとするためには、「何のために言葉を使うのか」という視点を明確にし、学習活動の目的を意識できるようにすることが重要である。

このため、〔思考力・判断力・表現力等〕の内容については、

第1層：領域（話す・聞く／書く／読む）

第2層：言葉を使う目的（仮称）

の二層構造で整理して示すことが最も有効な示し方ではないか。

- この構造は、領域を基盤としつつ、その下位に学習の方向性や意味を捉える視点を位置付けるものであり、国語科の特性を踏まえた資質・能力の育成につながると考えられる。
- 国語科は、思考力・判断力・表現力等の系統性が明確で、知識及び技能の内容のまとまりに対応した固有の思考力・判断力・表現力等が想定しにくく、知識及び技能が全体として思考力・判断力・表現力等の深まりを助ける構造をもつ。
- このため、表形式で示すにあたっては、思考力・判断力・表現力等の深まりを明確にできるよう列として示し、その深まりを知識及び技能が支えながら一体的に育まれていくことを視覚的に示すことにより、学習指導への改善に資することが期待できることから、**並行パターンで表形式にすることとしてはどうか。**（P.6補足イメージ1参照）
- また、議題（2）論点3で審議する、高次の資質・能力の示し方においても、上記の理由から、**並行パターンで表形式にすることとしてはどうか。**

学習指導要領のデジタル化を踏まえた表形式の工夫

- 学習指導要領の使いやすさを高める観点から、学習指導要領のデジタル化が検討されており、以下の利用方法も想定される。
 - 表形式データをダウンロードして
 - 表計算ソフト等で任意に並べ替え
 - 「言葉を使う目的（仮称）」によって複数領域を横断した単元構想に活用する

〔思考力、判断力、表現力等〕（A 話すこと・聞くこと）と〔知識及び技能〕（①各領域の学習の過程で生かし深める側面）を表形式で示した場合のイメージ

【領域】 A 話すこと・聞くこと		1 学年相当	2 学年相当	3 学年相当
思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮 目的などに応じて、社会生活に関わる課題や出来事などについて、自分の考えや感じたことなどを相手に伝えるように工夫して話すとともに、相手の話を聞いたり話し合ったりして考えを広げ深めることができる。	【言葉を使う目的(仮称)】			
	(1) 情報の伝達	ア ○○○○	ア ○○○○	ア ○○○○
	(2) 他者の説得			
	(3) 情報の獲得/他者の主張の吟味			
	(4) 合意形成			
知識及び技能に関する統合的な理解 社会生活に必要な言葉の様々な意味や働き、使い方等を身に付け、目的などに応じて使うことにより、理解や思考、表現の質が高まることを理解している。				
	(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項			
	(2) 情報の扱い方に関する事項			
【知識及び技能】				

※言葉を使う目的(仮称)、事項のまとまり(仮称)の内容の詳細については今後の「内容」等の検討を踏まえて引き続き検討

※他の領域及び〔知識及び技能〕（②各領域の学習を支える文化的な知識や態度、教養として深める側面）は省略

※〔思考力、判断力、表現力等〕の事項は、学習活動に取り組む中で、各学習過程でどのように思考・判断・表現するのかが分かるような形で整理することを、今後、検討。

2. 内容の表形式化の具体的な考え方(「並行」パターン)

- 「並列」パターンでは、「知・技」に対応して一体的に育成を目指す「思・判・表」を並列して示すことで「ヨコ」の関係を示すこととしている。このパターンは、「知・技」の内容の系統性が明確で、「知・技」の内容のまとまりに対応した固有の「思・判・表」が想定できる教科では具体的にイメージしやすく、「思・判・表」の活動を通じて対応する「知・技」を育成していく学習指導への改善に資することが期待できる

(例) 数学では、関数における「思・判・表」と図形における「思・判・表」は異なるものが想定される

- 一方で、教科によっては、「知・技」よりも「思・判・表」の系統性が明確で、「知・技」の内容のまとまりに対応した固有の「思・判・表」が想定しにくく、「知・技」が全体として「思・判・表」の深まりを助けるといった構造のものもある

(例) 国語では、漢字・文法・情報の扱い方などの「知・技」に対応した「思・判・表」が明確ではなく、話すこと・聞くこと、書くこと、読むことといった「思・判・表」のそれぞれの深まりを、「知・技」が全体として支えている構造となっている

- このような教科は、「並列」パターンのように「知・技」に対応した「思・判・表」を並列して見せることの意義は小さい。むしろ下部のイメージのように、「思・判・表」の深まりをまず明確にできるよう列として示し、その深まりを「知・技」が支えながら一体的に育まれていくことを視覚的に示すことにより、「知・技」が全体として「思・判・表」の深まりを助けることを具体的にイメージしやすく、学習指導への改善に資することが期待できる(次頁イメージ図参照)

思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮 XXXXXXXXXXXXXXXX	1)	•XXXXXXXX	•XXXXXXXX	•XXXXXXXX
	2)	•XXXXXXXX	•XXXXXXXX	•XXXXXXXX
	3)	•XXXXXXXX	•XXXXXXXX	•XXXXXXXX
知識及び技能に関する統合的な理解 XXXXXXXXXXXXXXXX	•XXXXXXXX •XXXXXXXX			

表形式による構造化パターン①（並列パターン）

令和7年10月14日
総則・評価特別部会
資料1-1 P.9
(会議意見反映版)

資質・能力の一体的育成の可視化

資質・能力の深まりの可視化

(1) 項目名		
	知識及び技能に関する統合的な理解	思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮
	この内容のまとまりを通じて獲得して欲しい統合的な理解等を示す（検討項目④で詳細を検討）	この内容のまとまりにおける知識及び技能を活用しつつ、思考力、判断力、表現力等を総合的に発揮して複雑な課題を解決できる力を示す（検討項目④で詳細を検討）
○学年相当	(小見出し) ・ ・ (小見出し) ・ ・ 右に示す思考・判断・表現の過程で、上に示す統合的な理解を獲得するために必要な要素となる知識及び技能を示す（検討項目⑤で詳細を検討）	(小見出し) ・ ・ (小見出し) ・ ・ 左に示す知識及び技能を活用しながら、上に示す複雑な課題の解決をする上で必要な要素となる思考力、判断力、表現力等を示す（検討項目⑤で詳細を検討）
○学年相当	(小見出し) ・ ・ (小見出し) ・ ・ 知識及び技能に対応する思考力、判断力、表現力等が共通する場合など、分けて示す必要がない場合は、可能な限り繰り返しを避け、セルを統合して示すなど簡素な示し方となるよう工夫する。	
○学年相当	(小見出し) ・ ・ (小見出し) ・ ・	
(内容の取扱い)		

想定する指導学年を明示する場合は、「○学年相当」という形で示す。
(示さない場合や、複数学年毎に示す場合、単学年毎に示す場合など柔軟に対応)

※表の読み方を示す柱書きや見出し、各項目の番号の示し方等の平仄については告示の検討に際して技術的に検討

表形式による構造化パターン②（並行パターン）

令和7年10月14日
総則・評価特別部会
資料1-1 P.11
(会議意見反映版)

資質・能力の深まりの可視化

		○学年相当	○学年相当	○学年相当
思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮 知識・技能を活用しつつ、思考力・判断力・表現力等を総合的に発揮して複雑な課題を解決できる力を示す（検討項目④で詳細を検討）	(1) 項目名	(小見出し) ・ ・	(小見出し) ・ ・	(小見出し) ・ ・
	(2) 項目名	(小見出し) ・ ・	下に示す知識及び技能を活用しながら、左に示す複雑な課題の解決をする上で必要な要素となる思考力、判断力、表現力等を示す。 （検討項目⑤で詳細を検討）	
	(3) 項目名	(小見出し) ・ ・	(小見出し) ・ ・	(小見出し) ・ ・
知識及び技能に関する統合的な理解 この内容のまとまりを通じて獲得して欲しい統合的な理解等を示す（検討項目④で詳細を検討）	(1) 項目名	(小見出し) ・ ・	左に示す統合的な理解を獲得し、上に示す思考・判断・表現を豊かにするために必要となる知識及び技能を示す（検討項目⑤で詳細を検討）	
	(2) 項目名	(小見出し) ・ ・	(小見出し) ・ ・	(小見出し) ・ ・
	(3) 項目名	(小見出し) ・ ・	学年相当に分けて示す必要がない場合は、可能な限り繰り返しを避け、セルを統合して示すなど簡素な示し方となるよう工夫する。	
	(4) 項目名	(小見出し) ・ ・	(小見出し) ・ ・	(小見出し) ・ ・
(内容の取扱い)				

資質・能力の一体的育成の可視化

※表の読み方を示す柱書きや、見出しや各項目の番号の示し方等の平仄については告示の検討に際して技術的に検討

発達段階に応じて扱う話や文章の種類の系統性（再整理のたたき台）

【「実社会における目的に応じた話や文章の種類の再整理」と「目的の示し方」についてどう考えるか】

思考力、判断力、表現力等を育成する際に扱う話や文章の種類について、学校段階等に応じて系統的に整理（名称等は全て仮称）

目的	領域等	思考力、判断力、表現力等 (概略)【※1】	学校段階等に応じて扱う話や文章等の種類の例(概略)【※2】 現行学習指導要領の〔思考力、判断力、表現力等〕の各領域の(2)で示している言語活動例を基に概略のみを示している			
			小学校		中学校	高等学校(必修)
			低学年	中・高学年		
情報の伝達/ 情報の獲得	話す・聞く	・説明や解説などをする。 ・説明や解説などを聞いて自分の考えをもつ。	紹介や説明、報告など	紹介や報告など	紹介や報告、説明など	報告や連絡、案内、批評
	書く	・説明や解説などの文章を書く。	経験等の報告や観察の記録などの文章	調べたことの報告や事象の説明などの文章	文章や図表などを引用して説明したり記録したりする文章や報告の文章など	報告書、説明資料、案内文、通知文
	読む	・説明や解説などの文章の内容を理解して自分の考えをもつ。	事物の仕組みを説明した文章	記録や報告、説明や解説などの文章	説明や記録、報告や解説、報道などの文章、実用的な文章	実用的な文章、図表等を伴う文章
他者の説得/ 他者の主張の吟味	話す・聞く	・根拠に基づいて主張などを述べる。 ・主張などを聞いて自分の考えをもつ。	—	意見や提案など	提案や主張など	主張、論拠を示した同意、反論
	書く	・根拠に基づいて主張する文章などを書く。	—	意見を述べる文章	意見を述べる文章や批評する文章など	自分の意見や考えを論述する文章
	読む	・論説などの文章の内容を理解して自分の考えをもつ。	—	—	論説などの文章	論理的な文章、図表等を伴う文章
感動の共有/ 感動への共感	話す・聞く	・経験や思いなどを伝える。 ・経験や思いなどを聞いて感想をもつ。	(紹介や報告など)	(報告など)	—	—
	書く	・経験や想像したことを基に思いや感動を伝える文章などを書く。	簡単な物語など	詩や物語、短歌や俳句感想や自分にとっての意味などをまとめて書く	詩、随筆、短歌、俳句、物語など	短歌、俳句、詩、随筆
	読む	・文学的な文章の内容を理解して自分の考えをもつ。	物語など	詩や物語、伝記など	小説や随筆、詩歌など	随筆、物語、短歌、俳句、詩
合意形成	話し合う	・進行を工夫し互いの発言を関連付けて考えをまとめる。	尋ねたり応答したりする活動	それぞれの立場から考えを伝え合う話し合い	互いの考えを生かしながら議論や討論をする活動など	目的に応じて結論を得たり、多様な考えを引き出したりする議論や討論をする活動
古典に学ぶ	読む	・古典の文章の内容を理解して自分の考えをもつ。	古典に親しむことを目的として〔知識及び技能〕(3)の事項で扱う。			近世以前の文章 漢文、日本漢文、和歌
話題や題材の範囲			身近な出来事等	日常生活	日常生活 社会生活	実社会 言語文化の特質に関わりの深いこと

【※1】学校段階等に応じてどのような質的な高まりのある資質・能力を育成するかという詳細については、別途検討

【※2】該当する話や文章の種類が現行学習指導要領で示されていない場合は「—」とし、概ね該当すると考えられる話や文章の種類が示されている場合は（ ）で示している

思考力、判断力、表現力等

知識及び技能

国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力

A話すこと・聞くこと

高次の資質・能力	言葉を使う目的（仮称）	資質・能力（概略）
目的などに応じて、社会生活に関わる課題や出来事などについて、自分の考えや感じたことなどを相手に伝わるように工夫して話すとともに、相手の話を聞いたり話し合ったりして考えを広げ深めることができる	情報の伝達	・説明や解説などをする。
	他者の説得	・根拠に基づいて主張などを述べる。
	情報の獲得/他者の主張の吟味	・説明や解説、主張などを聞いて自分の考えをもつ。
	合意形成	・進行を工夫し互いの発言を関連付けて考えをまとめる。

B書くこと

高次の資質・能力	言葉を使う目的（仮称）	資質・能力（概略）
目的などに応じて、社会生活に関わる課題や出来事、自分の経験などについて、自分の考えや感じたことなどを相手に伝わるように工夫して文章を書くことができる	情報の伝達	・説明や解説などの文章を書く。
	他者の説得	・根拠に基づいて主張する文章などを書く。
	感動の共有	・経験や想像したことを基に思いや感動を伝える文章などを書く。

C読むこと

高次の資質・能力	言葉を使う目的（仮称）	資質・能力（概略）
目的など文章を読んで内容を理解し、社会生活に関わる課題や出来事、自分の経験などと結び付けながら考えを広げ深めることができる	情報の獲得	・説明や解説などの文章の内容を理解して自分の考えをもつ。
	他者の主張の吟味	・論説などの文章の内容を理解して自分の考えをもつ。
	感動への共感	・文学的な文章の内容を理解して自分の考えをもつ。

高次の資質・能力

事項のまとめ(仮称)

資質・能力(概略)

①各領域の学習の過程で生かし深める側面

様々な働きをもつ言葉の意味や性質を理解し、目的などに応じて使うことにより、言葉による理解や思考、表現の質を高めることを理解できる	言葉の特徴や使い方に関する事項	<ul style="list-style-type: none"> ・（言葉の働き）言葉が共通にもつ言葉の働きに気付く ・（話し言葉と書き言葉）文字と音声との対応、書き言葉のきまりなどを理解する ・（漢字）漢字を読む、漢字を書く ・（語彙）語句の量を増す、語句についての理解を深める ・（文や文章）単語、文、話、文章の構成を理解する ・（言葉遣い）相手や場に応じた言葉遣いを理解し使う ・（表現の技法）表現の技法の種類とその特徴を理解し使う
	情報の扱い方に関する事項	<ul style="list-style-type: none"> ・（情報と情報との関係）情報と情報との様々な関係を理解する ・（情報の整理）情報の整理の仕方やそのための手段を理解し使う

高次の資質・能力

事項のまとめ(仮称)

資質・能力(概略)

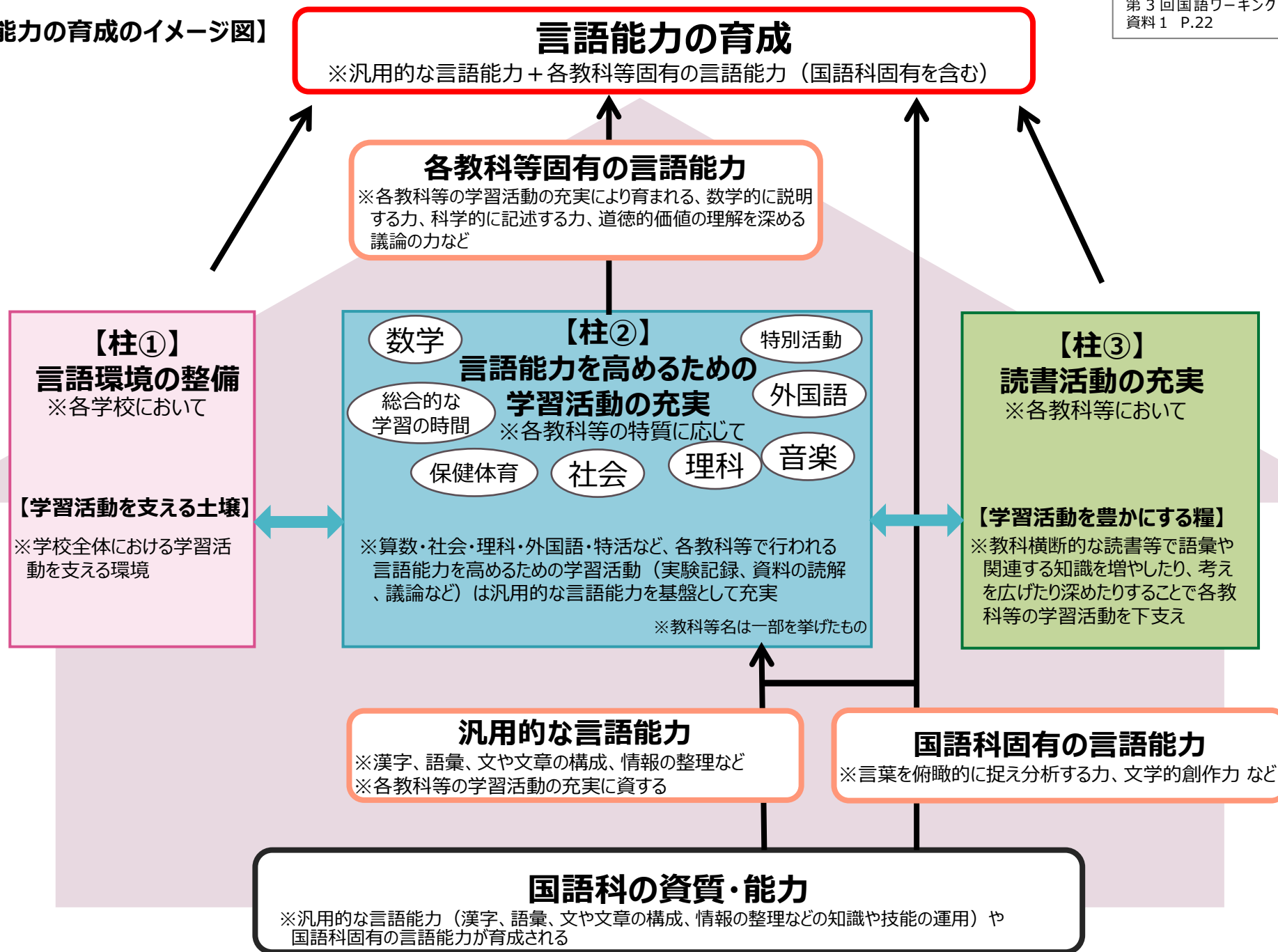
②各領域の学習を支え文化的な知識や態度、教養として深める側面

幅広く多様な言葉に触れ蓄えながら言語文化を理解することが、自己の形成、社会生活の向上、文化の創造と継承につながることを理解できる	我が国の言語文化に関する事項	<p>（伝統的な言語文化）伝統的な言語文化に親しむ</p> <p>（言葉の由来や変化）言葉の由来や変化を理解する</p> <p>（書写）我が国の伝統的な文字文化を理解し、文字を効果的に書く</p> <p>（読書）読書の意義や効用などを理解する</p>
--	----------------	---

※言葉を使う目的（仮称）、事項のまとめ（仮称）の内容の詳細については今後の「内容」等の検討を踏まえて引き続き検討

※資質・能力（概略）については現行学習指導要領をベースとしたものであり、詳細については今後の「内容」等の検討を踏まえて引き続き検討

【言語能力の育成のイメージ図】



**議題
(2)**

国語科を通じて育成する資質・能力 の在り方・示し方について

論点 1 「目標」等の在り方

論点 2 「見方・考え方」の在り方

論点 3 「高次の資質・能力」の在り方

1. 見方・考え方を含む目標の柱書きの示し方と改善の方向性

【現行】各教科等の目標の柱書（例：中学校国語）

言葉による見方・考え方を働かせ（**見方・考え方**）、言語活動を通して（**学習過程**）、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力（**資質・能力の趣旨**）を次のとおり育成することを目指す

【現行の解説】見方・考え方の記述

「対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めること」

<現行の記述ぶりの課題>

- 現在、各教科等の目標の柱書には、①見方・考え方、②教科に特徴的な活動、③資質・能力の趣旨が記載されており、冗長で分かりにくいとの指摘。一方、特に「見方・考え方」の具体は解説に落とされており、併せて読まないといけない。

<論点整理で示されたこと>

- 論点整理では、「見方・考え方」を、各教科等を学ぶ本質的な意義の中核に焦点化した上で、その具体を、解説ではなく学習指導要領本体に位置付ける方向性を示している
- また、論点整理では、「見方・考え方」の意義について、「教科固有の様々な世の中を見る視点や考え方が豊かになることで、徐々に資質・能力の育成を導く」といった観点だけでなく、「よりよい社会や幸福な人生に繋げる」とも位置付けており、学校教育のみならず、その後の人生でも豊かに働くことを視野に入れている

分かりやすく、使いやすいを目指す上で

- 特定の学校種・教科で育成したい資質・能力の趣旨等を端的に表す目標の柱書に、卒業後まで視野に入れた見方・考え方まで含めて書き下すと焦点が定まらなくなる
- 目標の柱書は、育成したい資質・能力の趣旨や固有の学習過程を端的に示すべきであり、見方・考え方は、目標直下に別途欄を設け記載してはどうか

2. 1.を踏まえた書きぶり（イメージ）

（目標）

● ● する資質・能力（**資質・能力の趣旨**）について、● ● することなどを通して（**学習過程**）、次のとおり育成することを目指す。

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力・人間性等
--------	--------------	--------------

（見方・考え方）

● ● （当該教科で扱う事象や対象）を● ● （当該教科固有の物事を捉える視点）の視点から捉え（に着目して捉え）、● ● （当該教科固有の考え方や判断の仕方）すること。

（見方・考え方に含める要素）

- 見方・考え方については、以下のような要素を含めることを基本に、各教科等の特質に応じて検討してはどうか
 - ① 当該教科等が扱う事象や対象
 - ② 当該教科固有の物事を捉える視点
 - ③ 当該教科固有の考え方や判断の仕方
- これらの要素を示す事により、教師が児童生徒の学習・指導を構想する際に「教科の本質を外していないか」を確かめられるものとなっているかという視点を大切にすることが重要ではないか

（見方・考え方の書きぶりに共通する留意事項）

- これまで各教科等の見方・考え方の書きぶりで示していた各教科等の深まりの鍵を示す部分は、構造化により示す中核的な概念等を通じて示すこととしているため、新たな見方・考え方の書きぶりについては現在よりも短く端的に示すことを基本としてはどうか
- 当該教科等を学ぶ本質的な意義の中核をわかりやすく示す観点からは、経験の浅い教師が読んでも端的に理解可能な記述となっているかという視点を重視して示し方を検討してはどうか（学習・指導を通じて、最終的に児童生徒が意識できるかという点も留意）



論点1 「目標」等の在り方

児童生徒が日常生活で培った言葉の経験を基盤に学びを進めるという教科の特性を踏まえ、

- 教科としての一貫性と内容の系統性の確保という観点から、小・中・高等学校の目標における柱書の文言を統一してはどうか。
- 育成したい資質・能力の趣旨や固有の学習過程を端的に記載してはどうか。

現状

小学校	中学校	高等学校
言葉による見方・考え方を働かせ，言語活動を通して，国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。		言葉による見方・考え方を働かせ，言語活動を通して，国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

▼ (参考)

●●する資質・能力（資質・能力の趣旨）について、●●することなどを通して（学習過程）、次のとおり育成することを目指す。

改訂案

小学校	中学校	高等学校
国語で理解し，考え，表現する資質・能力について，聞いたり読んだり，話したり書いたりすることなどを通して，次のとおり育成することを目指す。		



論点1 「目標」等の在り方

- 小中高の系統性を踏まえつつ、児童生徒の発達段階に応じた力の深まりを明確にする観点から、大きな方向性は共通としながら校種ごとに適切に書き分けてはどうか。
- とりわけ、知識及び技能を2つの側面（①各領域の学習の過程で生かし深める側面、②各領域の学習を支え文化的な知識や態度、教養として深める側面 ※第3回国語WG）で整理したことを踏まえた構成としてはどうか。
- 高等学校では、小中学校で身に付けた資質・能力をさらに深い理解につなげ、それを使用する場面が人生を通して続く社会参画の場であるということを示す表現に示してはどうか。

現状

小学校	中学校	高等学校
日常生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。	社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。	生涯にわたる社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。



改訂案

小学校	中学校	高等学校
日常生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うとともに我が国の言語文化に親しむことができるようにする。	社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うとともに我が国の言語文化を理解できるようにする。	生涯にわたる社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うとともに我が国の言語文化を深く理解できるようにする。



論点1 「目標」等の在り方

- 小中高の系統性を踏まえつつ、児童生徒の発達段階に応じた力の深まりを明確にする観点から、大きな方向性は共通としながら校種ごとに適切に書き分けてはどうか。
- 高等学校では、小中学校で身に付けた資質・能力をさらに高め、それを使用する場面が人生を通して続く社会参画の場であるということを示す表現にしてはどうか。

現状

小学校	中学校	高等学校
日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。	社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。	生涯にわたる社会生活における他者との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を伸ばす。

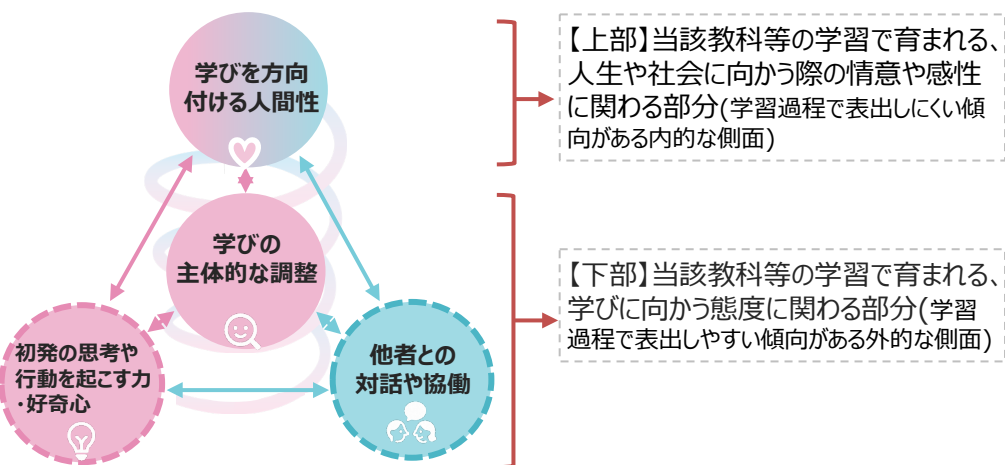


改訂案

小学校	中学校	高等学校
日常生活における人との関わりの中で、国語を通して互いの立場や考えを尊重しながら伝え合う力を高め、論理的に思考する力や豊かに想像する力を養う。	社会生活における人との関わりの中で、国語を通して互いの立場や考えを尊重しながら伝え合う力を高め、論理的に思考する力や豊かに想像する力を養う。	生涯にわたる社会生活における他者との関わりの中で、国語を通して互いの立場や考えを尊重しながら伝え合う力を高め、論理的に思考する力や豊かに想像する力を伸ばす。

1. 論点整理で示された方向性及び企画特別部会での議論

- 論点整理では、「学びに向かう力・人間性等」について、主要な要素や要素間の関係を構造化して分かりやすく示す観点から、下記の4つの要素により整理する方向性が示された
- 企画特別部会における議論の過程では、「学びに向かう力・人間性等」が単によりよい知の獲得に向けた力としてのみ捉えられてはならず、学習したことを踏まえて人生や社会に向かう際の情意・感性に係る側面も重視すべきとの強い意見があった



- また、論点整理では、「学びに向かう力・人間性等」の学習評価に関し、個人内評価を基本とした上で、学びに向かう態度に関わる下部の3要素については、学習評価において、「思考・判断・表現」の過程で特に表出した場合には「○」をつける方向で検討するとされている
- 「学びに向かう力・人間性等」は、学習指導要領の「内容」に原則として記載がなく、学習評価に当たっては教科等の「目標」を踏まえて行うこととなるため、そうした点も踏まえた「目標」の書きぶりが重要

※ 現行、各教科等において育成する「学びに向かう力・人間性等」は、個別の学習内容に応じて異なることが想定されにくいため、原則として各教科等の「目標」水準でのみ記載されている。こうした性質は、今回の論点整理に伴って変わるものではない。

2. 1. を踏まえた目標における書きぶり

- 1. を踏まえると、「学びに向かう力・人間性等」の目標については、全ての要素を個別に盛り込もうとすることで冗長となることを避けつつ、以下の2つの要素をバランス良く含めることとしてはどうか

① 当該教科等の学習で育みたい学びや生活に向かう態度

学びにおいて、好奇心を持って初発の思考や行動を起こし、他者との対話や協働を経ながら、学びを主体的に調整し、次の思考や行動に繋げていく態度について、教科固有の学習過程を踏まえた言葉で示す
(現行の例：自然の事物・現象に進んで関わり、科学的に探究しようとする態度（中・理科）)
→ 学びに向かう態度に係る3つの要素を踏まえた見直し

② 当該教科等の学習で育みたい情意・感性

人生や社会との関わりにおいて育みたい情意や感性を示す
(現行の例：自然を愛する心情（小・理科）、明るく豊かな生活を営む態度（中・体育）など)

- 一方、現行でも、複数分野を有する社会科など、多くの内容が盛り込まれ目標の書きぶりが複雑な教科もある中、分かりやすく使いやすい学習指導要領を目指す上では、今回の見直しで一層複雑となることは避ける必要
- こうしたことを踏まえ、目標については、表形式となることも踏まえ、箇条書きも利用して分かりやすく構造化することを可能としてはどうか（この点は知識及び技能、思考力、判断力、表現力等の目標も同様）



論点1 「目標」等の在り方

① 当該教科等の学習で育みたい学びや生活に向かう態度

② 当該教科等の学習で育みたい情意・感性

→小中高の系統性を踏まえつつ、児童生徒の発達段階に応じた力の深まりを明確にする観点から、大きな方向性は共通としながら校種ごとに適切に書き分けてはどうか。

現状

小学校

言葉がもつよさを認識するとともに、言語感覚を養い、国語の大切さを自覚し、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

中学校

言葉がもつ価値を認識するとともに、言語感覚を豊かにし、我が国の言語文化に関わり、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

高等学校

言葉のもつ価値への認識を深めるとともに、言語感覚を磨き、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、生涯にわたり国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

小学校

①考えたり感じたりしたことを積極的に言葉で伝え合い、他者との関わりの中で振り返り、言葉がもつよさを認識し、その能力の向上を図る態度を養う。
②言語感覚を養い、国語の大切さを自覚し、国語を尊重する態度を養う。

中学校

①考えたり感じたりしたことを積極的に言葉で伝え合い、他者との関わりの中で振り返り、言葉がもつ価値を認識し、その能力の向上を図る態度を養う。
②言語感覚を豊かにし、我が国の言語文化に関わり、国語を尊重する態度を養う。

高等学校

①考えたり感じたりしたことを積極的に言葉で伝え合い、他者との関わりの中で振り返り、言葉のもつ価値への認識を深め、その能力の向上を図る態度を養う。
②言語感覚を磨き、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、国語を尊重する態度を養う。

改訂案

【参考資料】学校種毎の目標の示し方（改訂案）

目標		
国語で理解し、考え、表現する資質・能力について、聞いたり読んだり、話したり書いたりすることなどを通して、次のとおり育成することを目指す。		
知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
日常生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うとともに我が国の言語文化に親しむことができるようにする。	日常生活における人との関わりの中で、国語を通して互いの立場や考えを尊重しながら伝え合う力を高め、論理的に思考する力や豊かに想像する力を養う。	①考えたり感じたりしたことを積極的に言葉で伝え合い、他者との関わりの中で振り返り、言葉がもつよさを認識し、その能力の向上を図る態度を養う。 ②言語感覚を養い、国語の大切さを自覚し、国語を尊重する態度を養う。
社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うとともに我が国の言語文化を理解できるようにする。	社会生活における人との関わりの中で、国語を通して互いの立場や考えを尊重しながら伝え合う力を高め、論理的に思考する力や豊かに想像する力を養う。	①考えたり感じたりしたことを積極的に言葉で伝え合い、他者との関わりの中で振り返り、言葉がもつ価値を認識し、その能力の向上を図る態度を養う。 ②言語感覚を豊かにし、我が国の言語文化に関わり、国語を尊重する態度を養う。
生涯にわたる社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うとともに我が国の言語文化を深く理解できるようにする。	生涯にわたる社会生活における他者との関わりの中で、国語を通して互いの立場や考えを尊重しながら伝え合う力を高め、論理的に思考する力や豊かに想像する力を伸ばす。	①考えたり感じたりしたことを積極的に言葉で伝え合い、他者との関わりの中で振り返り、言葉のもつ価値への認識を深め、その能力の向上を図る態度を養う。 ②言語感覚を磨き、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、国語を尊重する態度を養う。



論点2 「見方・考え方」の在り方

見方・考え方（各教科等を学ぶ本質的な意義の中核）

- 各教科等の資質・能力が身に付く中で、**様々な世の中を見る視点や考え方が豊かになり、よりよい社会や幸福な人生に繋げていけること**を見方・考え方によって示す
- 目標の柱書は、育成したい資質・能力の趣旨や固有の学習過程を端的に示すべきであり、見方・考え方は、目標直下に別途欄を設け記載してはどうか

書きぶりイメージ

（教科で扱う事象や対象）を
（教科固有の物事を捉える視点）の視点から捉え（に着目して捉え）
（教科固有の考え方や判断の仕方）すること

留意点

- 現行より**短く端的に**
- **経験の浅い教師が読んでも端的に理解可能な記述に**

現状

対象と言葉，言葉と言葉との関係を，
言葉の意味，働き，使い方等に着目して捉えたり問い直したりして，言葉への自覚を高めること

（参考①）解説

「対象と言葉，言葉と言葉との関係を，言葉の意味，働き，使い方等に着目して捉えたり問い直したり」するとは，言葉で表される話や文章を，意味や働き，使い方などの言葉の様々な側面から総合的に思考・判断し，理解したり表現したりすること，また，その理解や表現について，改めて言葉に着目して吟味することを示したものと言える。

言葉による見方・考え方を働かせるとは，児童（生徒）が学習の中で，対象と言葉，言葉と言葉との関係を，言葉の意味，働き，使い方等に着目して捉えたり問い直したりして，言葉への自覚を高めることであると考えられる。様々な事象の内容を自然科学や社会科学等の視点から理解することを直接の学習目的としない国語科においては，言葉を通じた理解や表現及びそこで用いられる言葉そのものを学習対象としている。このため，「言葉による見方・考え方」を働かせることが，国語科において育成を目指す資質・能力をよりよく身に付けることにつながる事となる。

（参考②）第2回提示「現行の記載を基に総則・評価特別部会の方針を当てはめた「たたき台」

「対象と言葉，言葉と言葉との関係を，言葉の意味，働き，使い方等に着目して捉え，言葉への自覚を高めること。」

改訂案

自分や他者の言葉を、
その意味や使い方、表現の意図等に着目して多面的・多角的に吟味し、
多様な立場や考えを理解しながら、丁寧に言葉を紡ぎ、よりよく伝え合うこと

（教科で扱う事象や対象）を
（教科固有の物事を捉える視点）の視点から捉え（に着目して捉え）
（教科固有の考え方や判断の仕方）すること



「見方・考え方」の現在の位置付け

- 前回改訂では、「社会に開かれた教育課程」を理念に掲げ、これからの社会で生きていくための資質・能力を身に付けるための学びの過程として「主体的・対話的で深い学び」を提起した
- 一方、「主体的・対話的で深い学び」だけでは、
 - ① 各教科等の深い学びの具体的な姿がイメージしにくい
 - ② 各教科等の学びにより、人生や社会との関わりがどう豊かになるのかイメージしにくい 等の懸念が生じた

このため

- 資質・能力と教科等の学びを架橋するため、「見方・考え方」を提起し、各教科等の目標の一部として位置付けた（詳細は解説で記載した）

【定義】どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのかというその教科等ならではの物事を捉える視点や考え方

- 上記①②に対応し2つの側面で説明されてきており、授業改善に一定の成果があったといえる

側面① 各教科等の学びの深まりを示す

教科の特質に応じた「見方・考え方」を働かせることで深い学びが実現され、よりよく資質・能力を育成でき、資質・能力の育成により「見方・考え方」が一層豊かになる

側面② 各教科等を学ぶ本質的な意義の中核を示す

学びを通じてどのような教科等固有の世の中を見る視点や考え方が身につくのかを示すことにより、教科等を学ぶ本質的な意義を明らかにし、学びをよりよい社会や幸福な人生に繋げていく役割がある



課題と方向性

令和7年9月25日
教育課程企画特別部会
論点整理 P.20

1. 当初の役割を十分に果たせていない

- 見方・考え方は各教科等の目標の一部になっているが、その具体は、解説を読まないと分からない
- 教科等によっては解説の記載が複雑かつ抽象的で分かりにくい（「見方・考え方」が①「各教科等の学びの深まり」と②「各教科等を学ぶ本質的な意義の中核」という2つの側面を有していることも影響）

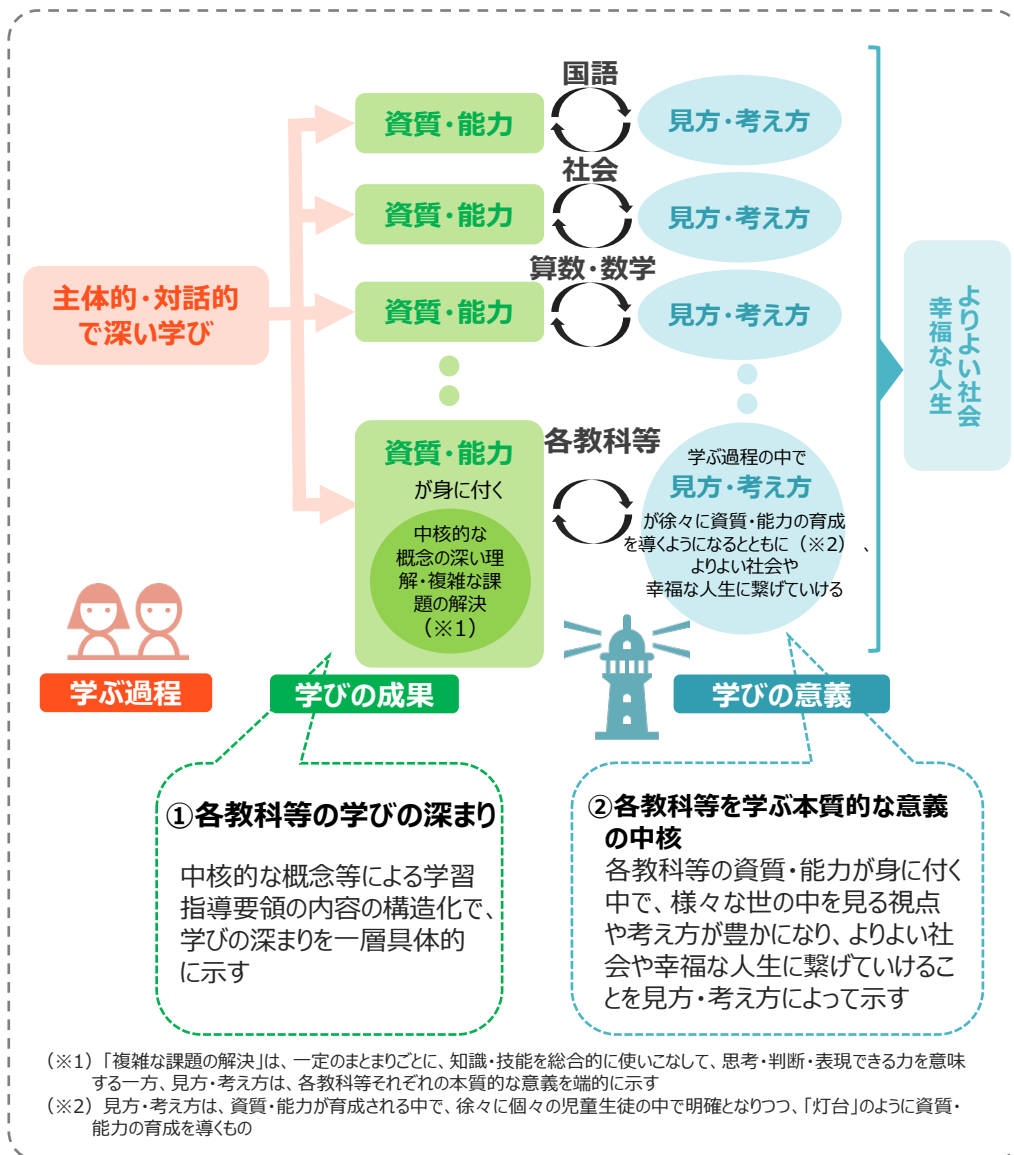
2. 「中核的な概念等」との整理が必要

- 第2・3回の特別部会では、各教科等の「中核的な概念等」の視点から
 - (1) 個別の知識及び技能が相互に関連づけられた「教科の主要な概念の深い理解」
 - (2) 個別の思考力、判断力、表現力を総合的に働かせた「複雑な課題の解決」を抽出し、一層の構造化を図ることとした
- この方針で進める場合、「見方・考え方」（とりわけ側面①各教科等の学びの深まり）との重複感が出る

これらを踏まえると

- 「見方・考え方」の側面①「各教科等の学びの深まり」は、「中核的な概念等」による資質・能力の構造化によって一層具体的に示し、
- 「見方・考え方」自体は、側面②「各教科等を学ぶ本質的な意義の中核」に焦点化してより端的に示していくこととする方向で検討すべき

今後の見方・考え方の役割の改善イメージ



改善イメージ

目標

～以下の資質・能力を育成することを目指す。
(目標での見方・考え方の記載ぶりは別途検討)

(例) 事象を、数量や図形及びそれらの関係などに着目して捉え、論理的、統合的・発展的に考える

知・技

思・判・表

学・人

②本質的意義

教科の本質的な意義に焦点化して端的に示すことで教科を学ぶ本質的な意義を分かりやすく本則上で示すことができる

内容

中核的な概念の深い理解 (仮)

複雑な課題の解決 (仮)

①学びの深まり

学びの深まりは中核的な概念等による構造化の中で、内容に即して具体的に示す

(例) 関数を使えば未知の状況を予測できる

(例) 現実の事象を数式でモデル化し、未知の状況を予測して、具体的な解決策を選択する

知・技

思・判・表

(例) 比例・反比例の理解、一次方程式の解き方

(例) 二つの数量の変化・対応関係を見出し、式やグラフを用いて考察する

※従前の見方・考え方の整理は、見方・考え方が資質・能力の一部と誤解される遠因となっていたことから改善を図り、見方・考え方は、資質・能力（中核的な概念等を含む）の育成を的確な方向性に導くとともに、よりよい社会や幸福な人生に繋げていける学びの本質的な意義として整理する

「資質・能力の深まり」と「資質・能力の一体的育成」の可視化による「深い学び」の具現化

- 知識の理解も、それが生きて働くように深く学ぶことが重要。思考力、判断力、表現力等も、社会や生活で直面する未知の状況でも課題解決に繋げていけるよう「質」を高めることが重要（**資質・能力の「深まり」**）
- ある程度の知識・技能なしに思考・判断・表現することは難しいし、思考・判断・表現を伴う学習活動なしに、知識の深い理解と技能の確かな定着は難しい（**資質・能力の「一体的育成」**）
 ➡こうした「**資質・能力の深まり**」と「**資質・能力の一体的育成**」を学習指導要領上で可視化することにより、**資質・能力の関係性の理解や、それらを一体的に育成するための教師の単元づくりを助け、「深い学び」を授業で具現化しやすくする**

＜生きて働く＞

知識及び技能

他の学習や生活の場面でも活用できる

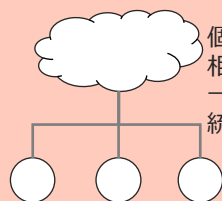
高次の資質・能力

知識及び技能に関する統合的な理解

個別の知識や技能が相互に関連付けられて一般化され、統合的な理解となった姿

（例）関数を使えば未知の状況を予測できる

資質・能力の
「深まり」の
可視化



個別の知識や技能が相互に関連付けられて一般化されながら統合的に理解される

個別の知識や技能

（例）
 ・比例・反比例の理解
 ・一次方程式の解き方
 ・二元一次方程式を関数としてみなせることの理解
 ・現実の事象を関数でモデル化できることの理解
 ・二次関数でモデル化できる事象があることの理解



資質・能力の
「一体的育成」
の可視化



＜未知の状況にも対応できる＞

思考力、判断力、表現力等

知識・技能を活用しながら、未知の場面でも課題を解決できる

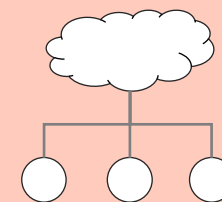
高次の資質・能力

思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮

複雑な課題の解決に向けて、個別の思考力、判断力、表現力等を組み合わせたり選んだりして総合的に働かせた姿

（例）現実の事象を数式でモデル化し、未知の状況を予測して、具体的な解決策を選択する

資質・能力の
「深まり」の
可視化



複雑な課題の解決に向けて、個別の思考力、判断力、表現力等を総合的に働かせる

個別の思考力、判断力、表現力等

（例）
 ・二つの数量の変化・対応関係を見だし、式やグラフを用いて考察する
 ・現実の事象にある二つの数量の関係を関数と仮定して処理したりその結果に基づいて判断する

1. 「高次の資質・能力」の可視化の目的

- 検討項目③では表形式での内容の構造化で、
 - ✓ 「知・技」「思・判・表」の深まりの可視化
(従前の「タテ」の関係の可視化)
 - ✓ 「知・技」「思・判・表」の一体的育成の可視化
(従前の「ヨコ」の関係の可視化)
- を図ることにより、資質・能力の関係性の理解に基づき、それらを一体的に育成する単元づくりを助け「深い学び」を具現化しやすくする方策を検討した
- このうち特に、「知識及び技能の統合的な理解」「思考力・判断力・表現力等の総合的な発揮」(※以下、総称して「高次の資質・能力」)を示すことについては、「知・技」「思・判・表」の深まりの可視化を通じて「深い学び」を実現する単元づくりのイメージを教師が持てるようにする役割を担うもの

※論点整理では、「知・技」の深まりを示すものを「中核的な概念の深い理解」、「思・判・表」の深まりを示すものを「複雑な課題の解決」と仮称し、それらをまとめて「中核的な概念等」と呼んでいたが、新たな用語が増えることを避けるため現行でも用いられている言葉を用いることとしたもの。「知識及び技能の統合的な理解」「思考力・判断力・表現力等の総合的な発揮」をまとめて呼称する際、以後「高次の資質・能力」と呼ぶこととする

2. 各WGでの検討に当たっての考え方

- こうした役割を果たす「高次の資質・能力」を各WGで具体的に抽出する際、各教科等固有の学習過程の改善を図るためには、教科ごとの特質に応じて検討が行われる必要があります、書きぶりを現時点で一律に整理すべきものではない
- 一方で、各教科等での「高次の資質・能力」は、備えるべき要素や性質等について、一定の共通性があることにより、各教科等を横断して適切に機能を発揮することが期待できる
- 各教科等の独自性を活かしつつ、共通に備えるべき要素や性質等が確保された「高次の資質・能力」の書きぶりとなるよう、次頁のように「高次の資質・能力」がその目的を踏まえたものとなっていることを担保するチェックポイントを示した上で、各教科等WGでの検討を深めてはどうか(次頁参照)
- なお、「全てのポイントに照らして異論の余地のない」ものを検討することは困難な場合も考えられるため、各教科等の授業改善に資する点を重視しつつ検討を進めるべきではないか

「高次の資質・能力」を検討する上でのチェックポイント(案)

【A 教科等の本質的意義の中核に照らした重要性の観点】

- ・目標の達成に資する上で重要であるとともに、各教科等の本質的意義の中核(「見方・考え方」)に照らし適切なものであるといえるか

【B 資質・能力の深まりを示す観点】

- ・要素となる個別の資質・能力の「深まり」を示す事ができているか。具体的には、内容のまとまりを単に要約した「見出し」に留まるのではなく、個別の資質・能力が児童生徒の中で相互に関連付けられて、統合的に獲得された際の姿を示すことができているか
- ・要素となる個別の資質・能力を学ぶことの意義(※)や、それを広く社会において、いつ、どのような文脈で活用することができるのか、を教師がイメージしやすいものとなっているか

(※) 学ぶことの「意義」は必ずしも実生活における実用的な側面にとどまらない点に留意

【C 深い学びを実現する単元づくりを助ける観点】

- ・教師が単元構想時に、「知識及び技能の統合的な理解」と、それにぶら下がる個別の「知・技」、「思考力・判断力・表現力等の総合的な発揮」と、それにぶら下がる個別の「思・判・表」とを往還して参照した際、単元を通じて児童生徒が追究する本質的な「問い」を構想する上で参考になるか
- ・教師が単元構想時に、「思考力・判断力・表現力等の総合的な発揮」と、それにぶら下がる個別の「思・判・表」とを往還して参照した際、論述・レポート・発表・作品製作等、単元を通じて児童生徒が資質・能力を総合的に発揮しながら取り組む課題を構想する上で参考になるか

【D 分かりやすさ等の観点】

- ・経験の浅い教師も含めて、一人一人の教師にとって、分かりやすく、使いやすいことに加え、教科等の面白さや魅力が伝わる文言となっているか(学習・指導を通じて、最終的には児童生徒自身が掴むことができる必要があるという点も留意)
- ・学校種・学年等、発達段階に即して妥当なものとなっているか(系統性等の重視により、発達段階に照らし過度に抽象的となっていないか等)



高次の資質・能力の示し方及び内容の考え方

論点3 「高次の資質・能力」の在り方

高次の資質・能力の示し方（第3回WGで審議）

- 高次の資質・能力、資質・能力（思考力・判断力・表現力等／知識・技能）の系統的な発展をわかりやすく提示するために、
 - 高次の資質・能力、言葉を使う目的（仮称）や事項のまとまり（仮称）、資質・能力の関係性を整理して示してはどうか
- また、学校段階や学年、科目など、どのような単位で高次の資質・能力を示すかについては、
 - ✓ 小・中学校は学校修了段階で獲得してほしい高次の資質・能力を示すことができるが、
 - ✓ 高等学校は学校・生徒によって履修する科目及び履修する学年等が異なることから、

【思考力、判断力、表現力等】

- 小・中学校については、領域ごとに示し、高等学校については、各科目別に領域ごとに示すこととしてはどうか

【知識及び技能】

- 小・中学校については、①領域ごとに共通の内容と、②全領域で共通の内容で示し、
- 高等学校については、各科目別に、①領域ごとに共通の内容と、②全領域で共通の内容で示すこととしてはどうか

高次の資質・能力の内容（第3回WGで審議）

- 高次の資質・能力については、
 - ① 国語科の目標や本質的な意義から演繹的に導かれる側面と、
 - ② 個別の学習内容をより深く習得するために帰納的に導かれる側面の2つがあることを踏まえて設定してはどうか

小中高の校種を踏まえた高次の資質・能力の内容の考え方（今回追加の視点）

- 国語科の指導内容は系統的・段階的に上の学年に繋がっていくとともに、螺旋的・反復的に繰り返しながら学習し、資質・能力の定着と深化を図ることを基本としている。このため、教科等の本質的意義の中核である「見方・考え方」は、小・中・高等学校を通じて共通に位置付けつつ、それを踏まえた高次の資質・能力については、発達の段階や校種ごとの目標に応じて、その深まりや広がりが適切に表現されるよう整理することとしてはどうか。
- 高等学校については、各科目の学習の意義を踏まえて、科目の深い学びが明確となる表現としてはどうか。



高次の資質・能力の案（小）

思考力、判断力、表現力等

知識及び技能

①各領域の学習の過程で
生かし深める側面

②各領域の学習を支える文化
的な知識や態度、教養とし
て深める側面

A話すこと・聞くこと

総合的な発揮

目的などに応じて、日常生活に関わる課題や出来事などについて、自分の考えや感じたことなどを相手に伝えるように工夫して話すとともに、相手の話を聞いたり話し合ったりして考えを広げ深めることができる。

統合的な理解

日常生活に必要となる言葉の様々な意味や働き、使い方等を身に付け、目的などに応じて使うことにより、理解や思考、表現の質が高まることを理解している。

B書くこと

総合的な発揮

目的などに応じて、日常生活に関わる課題や出来事、自分の経験などについて、自分の考えや感じたことなどを相手に伝えるように工夫して文章を書くことができる。

統合的な理解

日常生活に必要となる言葉の様々な意味や働き、使い方等を身に付け、目的などに応じて使うことにより、理解や思考、表現の質が高まることを理解している。
(再掲)

C読むこと

総合的な発揮

目的などに応じて文章を読んで内容を理解し、日常生活に関わる課題や出来事、自分の経験などと結び付けながら考えを広げ深めることができる。

統合的な理解

日常生活に必要となる言葉の様々な意味や働き、使い方等を身に付け、目的などに応じて使うことにより、理解や思考、表現の質が高まることを理解している。
(再掲)

統合的な理解

幅広く多様な言葉に触れ蓄えながら言語文化のもつ意義や価値に気付くことが、自己の形成、日常生活の向上、文化の創造と継承につながることを理解している。



国語科は「思・判・表」の系統性が明確で、「知・技」が全体として「思・判・表」の深まりを助ける構造で、深まりを「知・技」が支えながら一体的に育まれていく



高次の資質・能力の案（中）

第3回資料から更新

思考力、判断力、表現力等

知識及び技能

①各領域の学習の過程で
生かし深める側面

②各領域の学習を支える文化
的な知識や態度、教養とし
て深める側面

A話すこと・聞くこと

総合的な発揮

目的などに応じて、社会生活に関わる課題や出来事などについて、自分の考えや感じたことなどを相手に伝わるように工夫して話すとともに、相手の話を聞いたり話し合ったりして考えを広げ深めることができる。

統合的な理解

社会生活に必要な言葉の様々な意味や働き、使い方等を身に付け、目的などに応じて使うことにより、理解や思考、表現の質が高まることを理解している。

B書くこと

総合的な発揮

目的などに応じて、社会生活に関わる課題や出来事、自分の経験などについて、自分の考えや感じたことなどを相手に伝わるように工夫して文章を書くことができる。

統合的な理解

社会生活に必要な言葉の様々な意味や働き、使い方等を身に付け、目的などに応じて使うことにより、理解や思考、表現の質が高まることを理解している。
(再掲)

C読むこと

総合的な発揮

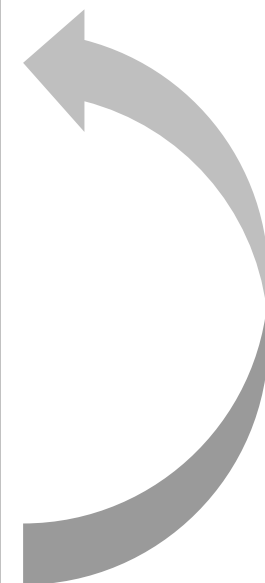
目的などに応じて文章を読んで内容を理解し、社会生活に関わる課題や出来事、自分の経験などと結び付けながら考えを広げ深めることができる。

統合的な理解

社会生活に必要な言葉の様々な意味や働き、使い方等を身に付け、目的などに応じて使うことにより、理解や思考、表現の質が高まることを理解している。
(再掲)

統合的な理解

幅広く多様な言葉に触れ蓄えながら言語文化のもつ意義や価値を捉えることが、自己の形成、社会生活の向上、文化の創造と継承につながることを理解している。



国語科は「思・判・表」の系統性が明確で、「知・技」が全体として「思・判・表」の深まりを助ける構造で、深まりを「知・技」が支えながら一体的に育まれていく



高次の資質・能力の案（高「現代の国語」）

思考力、判断力、表現力等

知識及び技能

①各領域の学習の過程で
生かし深める側面

②各領域の学習を支える文化
的な知識や態度、教養とし
て深める側面

A話すこと・聞くこと

総合的な発揮

目的などに応じて、生涯にわたる社会生活に関わる課題や出来事などについて、自分の考えや感じたことなどを相手に的確に伝わるように効果的に話すとともに、相手の話を聞いたり話し合ったりして考えを広げ深めることができる。

統合的な理解

生涯にわたる社会生活に必要な言葉の様々な意味や働き、使い方等を身に付け、目的などに応じて使うことにより、理解や思考、表現の質が高まることを理解している。

B書くこと

総合的な発揮

目的などに応じて、生涯にわたる社会生活に関わる課題や出来事などについて、自分の考えや感じたことなどを相手に的確に伝わるように効果的に表現した文章を書くことができる。

統合的な理解

生涯にわたる社会生活に必要な言葉の様々な意味や働き、使い方等を身に付け、目的などに応じて使うことにより、理解や思考、表現の質が高まることを理解している。（再掲）

C読むこと

総合的な発揮

目的などに応じて文章を読んで内容を理解し、生涯にわたる社会生活に関わる課題や出来事などと結び付けながら考えを広げ深めることができる。

統合的な理解

生涯にわたる社会生活に必要な言葉の様々な意味や働き、使い方等を身に付け、目的などに応じて使うことにより、理解や思考、表現の質が高まることを理解している。（再掲）

統合的な理解

幅広く多様な言葉に触れ蓄えながら言語文化のもつ意義や価値を深く捉えることが、自己の形成、生涯にわたる社会生活の向上、文化の創造と継承につながることを理解している。

国語科は「思・判・表」の系統性が明確で、「知・技」が全体として「思・判・表」の深まりを助ける構造で、深まりを「知・技」が支えながら一体的に育まれていく



高次の資質・能力の案（高「言語文化」）

思考力、判断力、表現力等

知識及び技能

①各領域の学習の過程で
生かし深める側面

②各領域の学習を支え文化
的な知識や態度、教養とし
て深める側面

A書くこと

総合的な発揮

目的などに応じて、自分の経験などについて、自分の考えや感じたことなどを相手に的確に伝わるように効果的に表現した文章を書くことができる。

統合的な理解

生涯にわたる社会生活に必要な言葉の様々な意味や働き、使い方等を身に付け、目的などに応じて使うことにより、理解や思考、表現の質が高まることを理解している。

B読むこと

総合的な発揮

目的などに応じて文章を読んで内容を理解し、自分の経験などと結び付けながら考えを広げ深めることができる。

統合的な理解

生涯にわたる社会生活に必要な言葉の様々な意味や働き、使い方等を身に付け、目的などに応じて使うことにより、理解や思考、表現の質が高まることを理解している。（再掲）

統合的な理解

幅広く多様な言葉に触れ蓄えながら言語文化のもつ意義や価値を深く捉えることが、自己の形成、生涯にわたる社会生活の向上、文化の創造と継承につながることを理解している。

国語科は「思・判・表」の系統性が明確で、「知・技」が全体として「思・判・表」の深まりを助ける構造で、深まりを「知・技」が支えながら一体的に育まれていく